

# 随想



## 落し穴

松岡 継雄

あるハワイの二世の人がはじめて日本に来て、帰ってからの報告に、日本では何処に行っても日本人ばかりだった、と言ったそうである。この事は、私達が日本を離れてみるとその印象が強い。外国へ行くと、自分の身の廻りに居る人は凡て外人なのである。特にヨーロッパに行くとその感が深い。勿論自国の人達が多い中で国籍の違った人達が右往左往しているのが目につく。外国へ行くと、周囲には毛色の異なる外人ばかりであると同時に、外人であるべき一人一人から見ても皆周囲には外人が多いのである。外国で

は、外人と共に生きてゆくということが彼等の社会構成の基本であり、日常生活のルールなのである。(インドの紙幣には金額が十の言葉で印刷されている)彼等の生活の中には、言葉のよく通じない人達と一緒に居るということが既にくらしの一コマなのである。

問題はこのへんにある。

私達は小さい時から、渡る世間に鬼はない」という庶民感情の中で育てられた。小さい時からの記憶でも、周囲に居た人達は皆頭の毛の黒い人達ばかりであった。そういう人間的コミュニケーションの中から我が国独特の義理も人情も生れて来た。「旅は道づれ世は情け」と言うモラルも、世の情けのワクの中で生かされた同胞の精神であった。しかしその意識は、フランスではフランス人ばかりであるというあやまちを犯す可能性があり。ローマなどへ行くと、世界の観光客が入り交って、何処の国の人だか見当もつかない。旅は道づれ世は情け」という観念に馴らされている日本人は、ついうまい手口にだまされて金や荷物を盗られたり、私と同行の人でパスポートを盗られた人があった。(パスポートを紛失すると、現地で再交付してもらうのに一週間以上はかかる)しかも、物珍らしげにお上りさん然とした恰好は、まさに彼等のよきカモなのである。外国で盗難に会うのは日本人が一番多い。彼等は生れながらにして国籍の違った人達と共に生き

て来た。小さい時から「人を見たらドロボーと思え」と教えられたかも知れない。勿論外国人は悪いということではない。罪はむしろ日本人のこの甘えにあるのである。旅は道づれ世は情け」を裏返せば、困った時には誰か助けてくれるだろうというこの甘えである。この意識は、困っても何とかなるだろうという考えにまで昇華する。これが危険なのである。日本人の海外に於ける失敗は、この人助けの甘えに原因していることが多い。ハワイの二世氏が指摘したように、日本には日本人ばかりしか居ないという環境は、いつの間にか世の中の情けに頼ることに馴らされて、何とかしてくれようという助け舟を出すことが、むしろ世間のよきコミュニケーションでもあるかのような錯覚を起しているかも知れない。外国に行かずとも日本人の「落し穴」は身近にあるかも知れない。

(元鶴屋専務)

## 火鉢に掌を

かざして

小林 紀美子

暮れに、民芸風の火鉢を一つ買いました。何も民芸風でなくてもよいのですが、

それしか火鉢らしきものは売っていないのでそうしたまでです。それからが大変。まず灰です。

灰は売っていませんでしたので、自宅が農家の女子社員がわざわざワラ灰とモミ灰を作って持ってきてくれたのは大助かりでした。

五徳と鉄ビンと火箸などを骨董屋さんなどあちこち歩き廻ってやっと揃えました。久し振りに、火鉢の前に座ってみました。紺の着物を着てみました。袖が少しめくられて、自然と掌を炭火の方に吸いつけられるようにかざして見ました。自分ながら、懐かしい仕草でした。火鉢が暖房の足しにもならないことは分っていましたので、あくまでもアクセサリーのつもりでしたのに、自分でも忘れていたあれこれのことに気づきました。

第一に炭火は生きていくということです。(当り前だよ)と笑われそうですが)種火を中に入れて上手に炭を積みあげないと火はおこりません。(そんなことをやりながらお婆ちゃんほど小さな種火からでも火をおこすことが上手だったことを思い出したりもしました。)燃えすぎないように、消えないように気を配りながらときどき炭をつぎ足してやらねばいけません。スイッチを入れて放しの暖房とは大きな違いです。面倒ですが、とっても楽しい。気を配る作業。

です。

第二に、炭火に掌をかざすということ

です。家族が、思い思いに大ききの違った掌をかざしながら、生きている火を囲んで話かはずみずみ。電気ゴタツの中に足をに入れて、TVのスイッチを入れる。モダンな団欒」とは本質的に違ふ何かがあるにはありました。

次に、お客様にとっても喜んで頂けました。火鉢のまわりに銚子とチョコと小鉢を並べて接待します。火箸で炭や灰をいじくりながら……です。お客様も盃を休めては掌をかざされます。不思議と他人行儀でないうちとけた話題がテーマになるものです。

他人?でさえもそうです。ましてや、あかあかと燃える炭火を囲んで親と子が掌をかざしあったら、今流行のバット事件など生まれる余地すらなかったでしょう。そう断定できるほど火鉢の囲りの対話にはしっかりとした落着きと、ほのぼのとした安らぎが生まれます。怒りや憎しみの感情などとてもでもです。火鉢への懐しさは郷愁ではありません。

ウソノと思われたら、ダメされたつもりで火鉢を囲んでみませんか。

新しい、いや私達が忘れていた日本家庭の暖かさを思い起こされるはずで、電気や石油ストーブの暖房では味わえ

ない暖かい交わり——一つの火鉢で、あれこれと思いをめぐらしたお正月でした。

(月刊「ホーム・ホーム」マネージャー、ワイドTKU・レポート)

## 「うちの

カミさん」

大江 捷也

うちのカミさんは、生粋の熊本の下町っ子である。既に卒寿を越えた祖母との会話などもあってか、その気風は現在も住居としている彼女の産まれた家とともに益々健在である。

彼女に言わすれば、蛙のバター焼きと、サーモンステーキとは全く別なものであるという。何故なら、蛙は北海道を主とする国産でサーモンはカナダを主とする輸入物であり、たとえ味は同じでも、食べる時に頭に浮かぶ風景が違うのだと頑固に言い張る。この調子だから、ベジタブルは冷凍野菜で、お野菜は生鮮野菜のことを指すことも聴き分けなければならぬ。

最初は英語と日本語の関係にしか過ぎ

ないのにと笑っていた高校生の息子も、母親がクリスマスにフォーレのレクイエムのお祝いに葬式のレコードを鳴らすなんてと流石に驚いたらしい。

しかし一族郎党教徒である彼女にとってみれば、クリスマスは感性的にキリスト教にふれる年に一度の機会なのである。従って街を歩けば聞こえてくるクリスマス音楽よりも、敬虔なカトリック信者であったフォーレの近代的な感覚を持ちながらも古い教会調特有の清浄な抒情性が全曲に流れているこの曲の方が相応しく聞こえるのである。

「ジングルベルよりも、こっちの方が美しく宗教的でしょう?」と言われて、息子の方も、「フランスのエスプリと宗教の持つ清浄さとの結合だ」などと話を合わせて逃げこむよりしかたがない。

レコードと言えば彼女の愛聴盤は、熊本ユースオーケストラの「新世界」である。他にも各国の著名なプロの物が三種類もあるのに、「新世界」と言えば、彼女はためらうことなく熊本ユース盤を選ぶのである。私にすれば、少し元気のよすぎるシンバルの音が逆に、彼女のお気に入りなのである。シンバルを叩く少年の誇りと喜びが目につくというのであ

熊本ユースは、上村澄春、猪本乙亥の両氏が、熊本の音楽文化の向上のために自らの演奏活動と引換えに二十代にして、より若き世代の育成を願って、どこからの援助を受けることもなく営々と育て上げた熊本の青少年によるオーケストラである。英国で催された世界青少年音楽祭で絶賛を受け、ホストオーケストラに選ばれ、世界的に評価されるまでになった。その苦勞と努力の象徴を彼女はこのシンバルに聴くのである。

先年、大津町で県芸術祭の移動展が催された折、釘を金錘で打ちながら絵を掛けている老人がいた。その年に日本で最も活躍された美術家に与えられる長谷川賞を受賞された坂本善三先生である。日本的な大家が、最も目立たない所で、黙々と熊本の文化運動のために努力をされているのに頭が下った。

このような方々のお名前を列挙したらいくら紙数があっても足りないところになり熊本の文化運動の根強さがある。また、その動きが全県的に拡がり出したところに未来がある。折りも折り、熊本県民文化センターが着工されたことは一層の拍車をかけるに違いない。

そんな訳で、仕事を放り出して手弁当で文化協会に出かける私を、うちのカミさんは笑顔で送り出すのである。

(熊本県文化協会常務理事)